

混乱



ハイライト

1. [戸惑い、混乱する](#):メディアがなければ、多くの学生たちは漂流した気分になった。その困難さは、学生たちが、文字どおり自分で何をすべきか分からなかっただけでなく、友達や家族と自由に繋がることができなかった場合、自分が何を感じているのか、或いは自分が何者なのかさえ明確にするのに障害を覚えたことである。学生たちは「メディア —特に携帯電話— が文字どおり自分たちを拡張したものになっている」と報告した。従って、メディアなしですぐすことは、彼らからすると、自分自身の一部を失ったかのように思わせることになった(詳細は[ここ](#)をクリック)。
2. [方向音痴](#):学生たちは実存的な損失に留まらず、「インターネット上のすべてのツールや、他のツールへのオンデマンド・アクセスが頼りにならなかった場合でも、文字どおり損失に陥った」と報告した。友達と繋がる方法は?彼らが行ったことのない場所をナビゲートする方法は?新しい状況に自発的に適応する方法は?香港の或る学生は、いまでも使えそうな非常に古いメディア技術 —折り畳み式の旅行地図— を購入したことを、誇らしげに書いた(詳細は[ここ](#)をクリック)。
3. [腕時計?目覚まし時計?トリビアの答え?](#):デジタル・メディアは、学生たちの生活における苦勞 —たとえ小さなものであっても— を鎮める。かなりの人数の学生たちが「時間を伝えるといった、特定の基本的なことのやり方を忘れてしまった」という彼らの当惑ぶりについて書いた。「何はともあれ、アナログ時計って、どうやって見るんだっけ?」彼らはまた、頭に残って離れないけれど重要ではない問題に対し、すぐ回答が出てくるという状況にどれほど依存していたか、言及した(詳細は[ここ](#)をクリック)。



参加国の大学に通う学生たちの混乱ぶりを示す棒グラフ(上)。数字は、各国の相対的な重みを表す。すべての感情を比較する完全なグラフに移動するならチャートをクリックのこと。

何が起きているのか?世界中の学生は「メディアは自分たちのパーソナル・アイデンティティに不可欠だ」と報告した。メディアは、他人がこちらをどう思っているのか、他人は自分自身をどう思っているのかを形成する。従って、メディアなしですぐすということは、学生たちがメディアの習慣だけでなく、自己の感覚にも立ち向かわなければならないことを意

味した。メディアを断った場合、彼らは何者なのだろう？

- ・チリ:「午後6時ぐらいだったかな、奇妙な感覚に襲われました。**何かよくないような、不快で、周りから遮断された感じです…散歩に出かけました…それでも、気分は変わりませんでした」**
- ・ウガンダ:「**別世界にいるような**—取り残された感じがしたので、それは楽な経験ではありませんでした。とても寂しかったので、なぜこのタスクに志願したのか、後悔すらし始めました」
- ・アメリカ:「**それ[メディア]をすべて取り上げられたので、私はホームレスのように感じました。結局、そうする手段を持っている人たちは通常、世界から切り離されることを拒否するんです」**
- ・中国:「**メディアなしでは、感情を表現することができませんでした。あたかも、自分の人生から、何か重要なものが引き抜かれてしまったようです」**
- ・メキシコ:「**家族以外の人とは話をしませんでした。ショックを受けたというのが事実です。現実の生活と仮想の生活が、まるで異なる平面上にありながら同じ時間に共存しているかのように、自分が常に気が散っている状態にあると気が付いたのは、不愉快な驚きでした」**

自己の拡張:学生たちは、携帯電話がなくて、心身の面でどれだけ寂しい思いをしたかを述べた。彼らは、携帯電話が”そこ”にある—テキスト、電話、ネット・サーフィン、ゲームがすぐに利用できる状態—ことを知っておきたいのである。携帯電話は、MP3 プレーヤーよりも、学生たちの快適さにとって非常に重要になってきた。そして、携帯電話を取り上げられると、学生たちは、まるで5歳の子供が安全毛布から引き離されたかのような、悲しくて寂しい思いをした。

- ・レバノン:「**携帯電話のことがずっと頭に浮かんでいました。私は、誰かにメッセージを送るとか、電話をかけるとかには熱心ではなかったんです。目の前にある携帯電話を”見る”気持ちが強かっただけなんです」**

「**携帯電話を持っていないことにバツの悪い思いをすることすら、私を困惑させました。いつも手に持っているのが習慣になっているので、携帯電話が手元にないと、なくしてしまった、と思って、鞆の中を探していたのだと思います」—アメリカ**

生活をナビゲートする:世界中の学生が、「メディアに四六時中アクセスしているので、友達を集めるとか、郊外に出かけるとか、予定とは異なる時間に帰宅するとか、自発的に決断することに慣れてしまった」と述べた。メディアが手元にないと、学生たちは困惑した。友達との出会いが難しくなったり、不可能になった。オンライン地図やインターネットにアクセスできないと、目的地までの経路を探ることが問題になった。家で夜を過ごすだけでも一苦

労だった。

アメリカ:「今回の課題によって、私たちが住んでいる世界、そして私だけでなく社会全体がいかにかテクノロジーにどっぷり漬かっているかに目を開かされました。もう1つ例を挙げると、その日のうちに叔母の家に行かないといけなかったんですが、テクノロジーなしだと、そこまでの道順をどう判断すべきかすら分かりませんでした。**GPS システムやマップクエストが登場する前は、みんなどうやっていたんでしょうね?私の世代は、「地図で旅行しろ」と言われても、地図が殆ど読めないでしょう」**

香港:「ここで言及すべきなのは、私はこの旅行のために地図を買った、ということですね。地図はメディアの1つですが、私が手にする[ことが許された]唯一のメディアでした。メディアなしだと生活が成り立たないのは、情報があって、しかも情報が私に安心感を与えてくれるからだと思います。メディアなしで24時間生活することは、旅行をする場合には悪くありません。旅行で予期しないことを経験したいと思っますからね。だけど、学校に行かないといけない、いくつかのプロジェクトを進めないといけない、といった普段の生活では、メディアは本当に重要です」

メキシコ:「家族を探す、恋人と連絡を取る、そんな簡単なことができなくなりました。私は、そこにいて、座って、待つしかできない感じでした。新しい情報にアクセスできないので、こういった新しい情報に基づいた活動もできないと感じました。その結果、仕事のない一日や休息日の感覚 一とともに、無知の感覚にも陥りました」

メディアが現在サポートしている”生活”とは何か?学生たちが自分の生活を分析してみると、携帯電話、インターネット、TV、ラジオ、すべてのデジタルへ容易にアクセスできないとどうにもならないことばかりだ、ということに彼らは気が付いた。

「イーサネットのケーブルを抜くと、生命維持システムをオフにするような気分になります。10年間、会ったり話したりしなかった人たちがランチで何を食べているか、気まぐれにチェックすることができなくなったし、同じ人たちに向かって、自分が何を食べているかを伝えることもできなくなりました」 —イギリス

しかし、仕事や社会生活はメディアを断つと確かに影響を受けるし、学生たちはドラマチックな表現を使って自分の喪失感に不平をもらすが、学生たちが問題点として列挙したことは、必ずしも本当の心配のレベルには達してないように思える。

レバノン:「アナログ時計で時刻を読むのは鬱陶しい作業でした。」3時45分なのか2時45分なのか、ずっと確認していました」

イギリス:「一日中、時計を使って時間をチェックしなきゃいけないなんて、私にとって、奇妙な概念でした」

イギリス:「私はコンピューターで調べたいことをずっと考えてました。このチャリティは

聞いたことあったっけ?この映画はよさそうかな?映画館に行くためにグーグル・マップを調べなきゃ、図書館で借りた本って延滞してなかったかな?イーベイで誰かが青い応接用の椅子を販売していないかしら?”私が死んでも、大好きな人よ”と書いたのはクリスティーナ・ロセッティだったっけ(正解)?”オズの魔法使い”はチャンネル4のナンバー・ワン・ミュージカルだったっけ(不正解)?そう言えばMGMはどうだったっけ?沈黙の中で絶え間なく続く思考の流れは、計り知れません」

アメリカ在住の或る学生が指摘したように、すべてのメディアが存在しなければ、そこには別の人生が存在する。「メディアがあるべき空白地帯が、あなたを取り囲む環境によって提供される別のものに置き換えられるんです。それは何でも構わないんです。例えば、車の中にメディアがなければ、私の空白地帯は創造的な思考で埋め尽くされます」